第５回学習講演会記録

いじめ指導を問い直す
～いじめで苦しむ子を救う、いじめ解決を子どもの学びにする～

都留文科大学教授　　宮下聡先生

（平成 28 年 12 月 3 日(土)）

高津先生：始まる前にちょっと聞いてみたいのですけれども、所属学科を手を挙げてもらえるといいんですけれども、管理栄養士をめざす実践の方どのくらいいますか？はい、ちょっと手を挙げて、はい、はい、いいですよ。管理栄養士も栄養指導でいろんな子どもに出会うので、栄養教諭になられるとは限らないのですけれど、今の子どものこと、とても参考になると思います。では次に、保健養護学科の養護専攻の方手を挙げて、はい、ありがとうございます。養護は今、何年生の人なんだろう？１年生、２年生、３年生、４年生、はい、ありがとうございます。養護教諭は養護の先生だけではなく、保健と看護の免許も取得するんだよね。だから、教科の先生として子どもと接することも念頭に入れておきましょうね。じゃあ、保健養護学科の科学専攻、家庭科コース、家庭科の人ばっかりじゃないかもしれないけれども、科学の人手を挙げてくれますか？はい、ありがとうございます。ほとんど、３年生かな？３年生の姿かなって思います。じゃあ、何となくメンバーが分ってきましたので、そろそろ講演会の方を始めたいと思います。今、ちょっとみどり先生がアンケート用紙の足りない分受取に行っていると思いますので、みどり先生が挨拶をする予定ではあったのですが、それはあとに回して、時間がありますのでさっそく学習講演会を始めたいと思います。今日の講師の宮下……

宮下先生：聡

高津先生：聡先生が、本当に中学で長い間教鞭をとって、『生活指導』、文科省で言うなら生徒指導のベテランの先生なので、『学校づくり』みたいなこともやっておられるし、こういう『いじめの指導』も色々研究して、発表してくださっているのね。今は、都留文科大学の教職支援センターの方で、みなさんのような教師のタマゴの学生さんたちに色々アドバイスをしたり、それから講義なさったり、ゼミも持ってらっしゃったりするんじゃないかと思うんですけれども、そういうことをしていらっしゃいます。みなさんが教育について教師について色々聞きたいなっていうことを答えて下さると思うので、今日の講演聞いて、是非聞きたいこと質問してみましょう。

　時間なので。先生こんな感じでよろしいでしょうか？はい、よろしくお願いします。マイクはどうされますか？

宮下先生：じゃあせっかくあるのでお願いしましょう。

　はい、みなさんこんにちは。都留文科大学で今教員をやっています宮下と言います。今高津先生の方からお話しがあったように、私は３６年間中学校の教師をしていて、そして退職をした後、都留文科大学で学校の先生になるという若い人達、みなさんと同じような人達に授業をやったり、相談にのったり、それから卒業して現場に入った先生方、１年目２年目、本当に大変と

今言われていますけど、そういう先生たちのサポートに回ったり、そんな仕事をしています。今日はこうやってみなさんの前でお話しできると、とっても楽しみで今日来ました。今日は「いじめ」っていうことがテーマです。さっきご紹介にもありましたけど、私が生活指導をやっていたと聞いて、ちょっと構えた人いたと思うんですね。なんかいつも朝礼台の前に立って、「コラッ！」っていう人、そういうイメージしかないと思うんですが…、そういう人でした。でも途中からこれでいいのかな？と疑い始めて、違う目線からものを見るようにしてみたら、違うものが見えてきた、そういう教員でした。今日はそんなことから、みなさんにこの「いじめ」の問題を切り口にして色々伝えたいこと、１時間半くらいですが伝えていこうと思います。もし納得できないことや、わからないことがあったら、どんどん聞いて頂けたらいいなと思います。

さっき、こっち側から見たら、すごく生徒が大変で取り締まらなきゃいけないって思ってやってきたけど、違う方向から見たら全然違うように見えたよっていう話、しましたよね。子どもを見るときに、あるいはいじめの問題を見るときに目線を変えてみると、全然違って見えるっていうことがあります。さっきお話を伺ったら、養護教諭になられる方とか、それから栄養教諭になられる方とか、家庭科の先生、いろんな道をめざす方がここにいらっしゃると聞いたのですが、多分みなさんは学校のなかで、きっと子ども達の相談相手になる立場かなというふうに思います。そこでちょっと問題を出しましょう。目線を変えてみるっていうのはどういうことかっていうことです、似た言葉で視線という言葉があります。視線と目線、似ているのですけど、みなさんはどう使い分けます？私は、視線っていうのは、何かが何かを見ているときのそれぞれを結ぶこの線、だから、誰かの視線を感じるとか、あの人の視線がまぶしいとかいうときに使うんじゃないのかなと思います。それに対して目線っていうのは、上から目線とか、教師目線とか、そんなふうに使うと思います。つまり目線というのは、どの立ち位置から物を見るかというときに使うのではないでしょうか。

そこで問題です。ここに３人の人がいます。３人とも同じものを見ているのですが、ある人はその図を見て「四角だ。」と言いました。「これどんな形している？」って聞いたら、「当たり前じゃん四角だよ。」。そっちの人見えるかな？「当たり前じゃん四角だよ。」こう言いました。誰が見たって四角だよ。そしたら別の人が「何言っているんだ。丸に決まっているじゃん。誰が言ったって丸だよ。」って言いました。３人目の人に聞いたら「何言ってるの。三角に決まってるじゃん。」こう言いました。学校の先生の目線で見ると、こういう風に見えるっていうことも、子ども目線で見ると全然違って見えるし、親目線で見ると、また違って見える…。そんなような感じです。じゃあ学校の先生の目線が正しくて、子どもの目線は間違っているのか。一体この物体はどんな形なんだろう。想像できます？多分みなさんのおうちにもあるし、使っているだろうと思われるものです。ここにあります。わかりますか？これです。紙コップです。これを潰します。そうすると、どうです？みなさんから四角に見えますよね。でも先生方からは三角に見えますよ。私には丸く見えます。だからこの物体をどっちの方向から見るかによって、丸に見えたり、四角に見えたり、三角に見えたり

します。教師は、学校の職員は、どうしても学校の教職員の目線で色んな事柄をとらえたりします。そうすると、子どもからどう見えるかということがなかなか分からない。そんなとき、「ちっとも私たちのことを分かってくれないじゃない。」って、子どもや親に対して思ったりすることがあります。みなさんは今学生ですから、学生の思いを先生たちはわかってくれない、なんて…。必修科目が重なっていて履修するとき困っちゃうとか、みなさんは単位落とすことはないでしょうが、一旦落しちゃったら、来年は本当に地獄のようになる。そこんとこ考えてほしいって、みなさんは思うかもしれないけど、先生方はそれは怠けたお前たちが悪いって思うかもしれません。先生方は昔学生だったことがありますが、みなさんは未だかつて大学の教員だったことはありません。中学や高校の先生は、かつて中学や高校の生徒でしたが、中学や高校の生徒は先生であったことはありません。とするならば、想像の翼を広げること…、昔ＮＨＫの朝ドラの『花子とアン』で花子が使った言葉なんですが、学生のみなさんは知らないか……。この想像の翼を広げてどんな景色が相手からは見えるか、考えてみることができるのは、教師の側なのか、子どもの側なのか、親の側なのか。これを考えてみたら、教師がしなくちゃいけないことって、答えが見えてくるんじゃないかなって思います。

さて今日の本題は「いじめ」の話ですので、本題に入らせていただきます。レジメは用意したのですが、このスライドに従ってお話しをさせて頂こうと思います。ただここに書かれている内容はだいたいレジメに書かれていますから焦って書き写す必要はないと思います。

「いじめ指導の常識、当たり前を問い直す」というタイトルを付けました。みなさんもこの大学の授業でおそらく「いじめ」について学んでいるのではないかなと思います。本を読んでいる人もいると思います。そうするとこれからお話しをすることは、もしかしたらそういうこととはちょっと違って、変な話と感じるかもしれません。でも目線を変えてみると、違った景色が見えるということで、今後の参考にしてもらえればいいと思います。あの、いじめがまたありましたね。今度は付属高校でしたね。なかなか合格するのが難しい学校。その前にもありましたし、青森でもありましたし、それから最近ではいじめで命を落としたりはしないけれども、原発の避難をしたということで、それを理由にいじめられて、そして不登校になって、フリースクールに行きながらそのいじめを告発したというニュースもありましたね。そして毎年いじめが何万件ということが、新聞やなにかで報道されたりします。このスライドにある１４万件というのは、大津の事件があったときの翌年の新聞です。前の年は１年間で７万件くらいだったのに、大津の事件のあと、半年間４月から４，５，６，７，８，９…って調べたら１４万件もあった、半年で倍になっている。これはえらいこっちゃということで、大騒ぎになりました。でも私はここを読んでいくと書いてあるんですが、これ私が取材を受けたんです。東京新聞から。ですからここに「排除は解決にならず」とか、「なぜいじめるか問え」とか「現場教諭取り組みは」とか書いてありますけど、これは私の言ったことなんです。私は数は問題じゃないよと言いました。いじめを考えるときに数は問題じゃない。なんで数が問題じゃないかというと、理由はこれです。大津の事件の後、「いじめ防止対策推進法」というのができまして、この法律にはこういうふうに書いてあります。「いじめとは、児童等に対して当該児童等が在籍する学校に在籍している当該児童等と一定の人間関係にある他の児童等が行う、心理的、

または物理的な影響を与える行為（インターネットを通じて行われるものも含む）であって、当該行為の対象となった児童等が心身の苦痛を感じているものをいう。」法律用語ですからこういう風になるんでしょうけど、なんとわかりにくいことか。結局簡単に言えば、学校の中で対人トラブルがあって、その結果誰かが心身の苦痛を感じていればそれは「いじめ」とみなきゃダメだよ、ということです。もちろんこの定義のもとになったのは、文部科学省の定義ですから、随分前から、いじめかどうかというのは、子どもが苦痛を訴えているか、感じているかどうかというところが分かれ目だよ。対人トラブルがあって、苦痛を感じたらいじめだよ、こういうような感じにっています。…とするならば、そもそも学校のなかで対人トラブルが起きるのは当たり前だし…。でしょ。だってそうですよね。みなさんは二人並んで座っていますが、みなさん大人ですからそんなことはないでしょうけど、「ちょっとこっち来すぎ」とか「消しゴム貸してよ」とか言って、「やだよ、買ったばっかりだし、ママに叱られちゃうし」「いいから貸してよ。」とか言って無理やり取られちゃって、心の中で「やだなー」って思って、これで心身の苦痛を感じていたら「いじめ」なの？ってなっちゃいます。さらにそれを借りたA君に、後ろにいたB君が「俺も貸してくれよ。」って言われて貸してあげた。一番最初の宮下君は「返してよ」って言ったら「Bに貸したよ。」「B君返してよ。」って言ったら「Cに貸したよ。」で結局わからなくなっちゃった。心身の苦痛、これいじめ。こんなことまでカウントしていたら大変。もっと言えば、「ボクと付き合ってください。」って告白したら、「ごめんなさい。私いまB君と付き合っているの。」って言ったらもう心身の苦痛。これいじめかってこういう問題になるでしょう。でもこれだけで考えたら、対人トラブルって言っていいかどうかわからないけど、心身の苦痛＝いじめ…。こういう風にしていったら、件数は１４万件なんて絶対に収まらないと思いません？そうなんですよ。収まらないんですよ。だから、ちゃんと報告したらそんなもんじゃ済まない。ということで、○○県はいじめが多いとか、○○県はいじめが少ないっていう発表を見て、こっちの県はいい県だ、こっちは心配な県だ。なんていうふうに以前はみられたこともあったんですけど、今はそんなふうにはみられない、むしろ逆に文科省は件数がゼロなんていう県はおかしいぞ、こう言っているんですね。調査は発生件数ではなくて、認知件数って言い方しています。つまり発生したかよりも、教員がどれだけ認知したか。いじめだというふうに認知したか。そこで問われるべきだっていう言い方になっています。だから起きないわけがない、とするならば、ゼロなんていう県があったなら「ちゃんと見ていない証拠だ、もう一回調べなおせ。」っていうのが、今の状況ですよ。ですから私は件数は問題じゃないって言いたいんです。じゃあ何が問題なんだっていうことなんですが、ちょっと批判めいたことを言いますと、あのいじめ対策推進法ができた前の年、大津で事件が起きたでしょう。そしてその後、みなさんご存知のように去年岩手で自殺事件がありましたし、あとを絶ちませんよね。だからいじめ対策推進法ができたからといって、このいじめ問題が解決するっていうふうにはならないんですね。いじめはどこにでも起きるものだ、っていうふうに考えて、教師は子ども達に向き合っていく必要がある。本当はここでアンケートを取りたいくらいなんですね。後でちょっと出てきますけど。みなさん「いじめ」ってなくなると思います？もうなんか、今の話を聞いていると、あっ、「あいつはなくならないって言わせようとしているぜ」って思っているでしょうね。私ね、あの定義でいったら、いじめは起きるものだと教

師は思いなさい、ってそのことをみなさんに言いたいんです。だからうちのクラスはいじめは起きていないからいいクラスだ！なんて思っているのは大きな間違いです。じゃあね、これ 1975 年から 2007 年の 2 月まで。みなさんのところにはもう一枚、プリントが用意されていますが、これは、いじめが原因で自殺した子のリストです。さっき、じっと見ている方いらっしゃいましたけど、私の大学の授業の中で、これを配ると、これお兄ちゃんの彼女だとか友達だとか、私のお姉ちゃんの彼氏だとか、うちの学校の先輩だとか、だって学校名が出ていますからね。ちょっとざっと見て。すごいでしょ。裏表印刷の方が 2006 年の何月かまでで、続きがもう一枚の片面印刷の方にあると思います。1 枚追加した片面印刷の方はぬきにして、ちょっと後でじっくり見てもらうことにして、前見てもらっていいですか。いじめデータから考える、1975 年から 2007 年 2 月まででいじめによる子どもの自殺報道の数が 157 人あった。これは報道された分だけです。でも、みなさんの中にも、私の周りにあったけど報道されなかった、ここに載っていないといのもきっとあるかもしれませんので、報道されていないのも含めると、こういうことです。

そのうち、１５７件の７３％が……、86.5％が……。なんだと思います？これ？

大学の授業だと、なにか特徴を見つけて下さいっていいます。「首つりが多い」って言ったりしますけどね。まあ、軽々しく話すようなことじゃないので結論を言います。こうです。７３％が中学生です。小学校の 6 年生から高校 1 年生まで含めると、86.5％になるんです。みなさんはもう勉強していると思いますので、この小学校 6 年生から高校 1 年生までの年代というのは、人間の一生の中で〇〇期って漢字 3 文字で言うじゃないですか。し〇〇〇期ね。あるでしょ。当てませんから大丈夫ですよ。思春期です。思春期にあたりますよね。中学の先生というのは、自殺者の７３％が中学生だ。思春期というのは、相手を傷つけやすくて、自分も深く傷つきやすい、しかもそれがずっとトラウマのように残っていく。私の大学の学生の中にも、中学とき代のいじめのことが、忘れられなくて、今でも引きずっていて、担任の先生の対応が納得できなくて、それを自分の卒論にした学生がいます。私も聞き取りをされたのですが、その聞き取りの中で、逆に質問を返していったりすると、泣き出してしまうんです。その頃のことがフラッシュバックしてくるんですね。それから小学校の中学年くらいからずっといじめられ続けてきて、高校までいじめられ続けてきた。居場所がなかった。部活なんかでちょっとあったのですが、そのなかでも自分のことが出せなかったという人が統合失調症になったり、あるいは、離人症という名前をお医者さんからつけられたり、今でも精神科に通っている人がいます。中学校というのは、そういう舞台になりやすいというか、なるのが宿命づけられたような場所なんです。そういう時期なんです。ですからみなさんの中には中学を職場にする方もいらっしゃると思いますが、そういう傷つきやすくて、傷つけやすい、そういう世代の子ども達と向き合っていくんだということを、肝に銘じておいてほしいなと思います。でもそうすると、やっぱり中学生とかかわるのは嫌だと思ってしまったりするでしょう。もし今度チャンスがあったら、中学教師ほど素敵な商売はないぞ、というお話もしたいんですけど、とりあえず今日はいじめですからね…。そういう大変な…、いやもっと大変なこと言いましょうか？もしかしたら自分のクラスから自殺者がでるかもしれない、自分の部活から自殺者がでるかもしれないってことなんです。出た場合、被害者のご両親が、学校の指導が納得できないと訴えをおこした場合、もちろん学校長は、被告人になり

ますが、担任も被告として、名前があげられるし、加害生徒も被告として名前があがるんです。今そうやって裁判がいくつも行われています。教師とはそういう仕事だっていうことなんです。いじめは対人トラブルの一種です。子ども集団の中で起きるのは決して異常なことではない。特別なことではありません。しかし、それを犯罪と呼ぶような事件にまで深化させてはいけないんだよ、ということを私はみなさんに言いたいと思います。時間があればこの人の遺書を本当は読んでもらいたいなと思います。この人の名前をいれて、インターネットで検索すると、遺書が出てきますから是非読んでください。1994 年 11 月 27 日、多分 4 年生の方がいらっしゃれば、4 年生が生まれた年ぐらいですね。大河内清輝君という中学生がいました。小学校時代からとても賢い子だったようです。愛知県の西尾市の東部中学校というところに通っていました。でも中学 2 年生のとき自分で首をつって命を絶ちました。この名前、大河内清輝君っていう名前を入れて「遺書」って検索すると出てきますからやってみてください。もう読んでいるととってもとっても辛くなりますけれど…。お金をいっぱい盗られたり、人には言えないような恥ずかしいことをさせられたり、川で泳がされたりとかね、「溺れちゃう！」って言って頭あげたら、またズブズブズブと突っ込まれちゃったりとか、そんなことがずっと続いていて、とうとう命を絶ってしまいます。清輝君の遺書、こういうエアメールの封筒に入っていました。おうちからお金を持ち出したので、そのお金の借用書、なんていうのもこうやって用意してありました。いじめはどこにでも起きる、文科省も言っているし、私も言っている。じゃあ清輝君みたいに、命を絶ってしまう子が出てもしょうがないのか。防げないからしょうがないのか？　こういう問題になるわけなんですが、ちょっと聞いてみたいと思います。さっき、私の考えを言ってしまったから、それに左右されてしまうかもしれないけれど、関係なく、理想に燃えた答えでいいんですよ。いじめは無なくせると思う人？……なくならないだろうと思う人？はい、ありがとう。なくさなきゃいけない、という気持ちはあるよね。でも多分なくならないんじゃないかって。私もそう思います。後で、そう思ってかまわないっていう理由を言いたいと思います。もし言い忘れていたら、質問の中で出してください。

じゃあ第 2 問。いじめ自殺は無くせるかどうかです。対人トラブルの中でどっちかが苦痛を感じる、というのがいじめだと言っているんですけど、そういういじめはなくせない、じゃあいじめによる自殺はなくせるか、なくせないか？これ聞いてみます。理由聞いたりしませんから安心して手をあげて下さい。先生方見てないから大丈夫です。「あの人は挙げた！」とか言われないからね。いじめ自殺は無くせると思う人？はい、ありがとう。自殺の原因がいじめによるものかというのは、今でも記者会見でよく校長先生がお話しますよね。他にも理由があったんじゃないか？　あるかもしれないですよ。私は、いじめはなくせないけれど、いじめ自殺はなくせる。ただ、子どもの自殺事件というのは増えていて、去年だったか、100 人を超えたっていうようなことも出てましたけど、それには他の理由もあるのでね。非常に難しいのですけど、自殺全部なくすことは難しくても、いじめが原因で死ぬということを避けることは私はできると思っています。その話をこれからします。

いじめがこうやってずっと起きてきて、いじめ自殺事件がこうやってずっと起きてきて、これは大変だということを世間の大人たちは色々考えて、作戦を考えて対策を取りました。

「いじめ防止対策推進法」を作りました。そして児童等はいじめを行ってはならないって決めました。これでいじめがなくなると思ったかどうかわかりませんが、でもさっきの新聞記事にもあったように、この後もいじめが続いています。だからこれではいじめはなくならないんです。法律を作ったらいじめがなくなるかってそんなやわなもんじゃない。子どもを甘くみるんじゃねえぞ！というのが私の思いです。少年法も変えました。罰則を強化しました。細かいことは今言う時間はないですが、是非調べてみて下さい。少年法っていうのは変わっていきます。もちろんみなさんの中には、少年法を厳しくしてそして罰則を強化して悪いことをやったやつは懲らしめてやらないといじめはなくならないんだ、という考えをお持ちの方もいらっしゃると思います。この間、青森でお祭りの写真が入選してどうのこうのっていう、あの後に、朝日新聞に投書がありました。その子だけを厳しくしてもダメだ。親も連座制で厳しくしろ。こういう投書があって、それに対して賛成、反対の意見がどっと寄せられて、その最初に言った人の意見と、そこに寄せられた様々な意見がまた載せられて、話題になりました。大学の授業でこれを印刷してグループでどの人の意見に賛成？ってことで話をしたんですけど、少年に対してだけ厳罰を課すんではなくて、親も同罪だっていう風にしないといけないんだ、っていう意見も出てきています。でもいじめはなくならないと思いますよ。道徳教育も強化しました。今度は道徳は特別な教科というふうになっていきます。でもね、あの例の大津の中学校は、文科省指定の「道徳教育実践研究事業推進指定校」だったんですね。ここで自殺事件が起きています。みなさんも新聞や何かで知っていると思います。それからいけないことをしたら、いじめをしたら出席停止だよ、生徒指導規定とかって、ゼロトレランスって聞いたことあります？もうどんな理由があったって、やったものはダメ、別室指導なんていうのをやっているところもあります。でもそこでいじめがなくなっているかといったら、なくなっていません。決まりを作って子どもに示したって、いじめはなくならない。じゃあどうしたらいいの？っていうことでしょう。「いじめ防止対策推進法」がこの国で国会で決まっていくときに、日本弁護士連合会、日弁連がこの「いじめ防止対策推進法」について随分意見を言いました。そのときに学習会なんかを開きました。私、ちょっとした繋がりがあったので、現場の教員としてそこに出て意見を言わせてもらいました。これからお話しする実践も語りました。そしたらいじめはしてはいけないということを、子どもはよく知っている。それでもいじめが起きるのはなぜか。学校は教師はいじめとどう向き合うのか。これまでと違った発想で考えることが大事だし、教育の力で変えられるんです、ということを私の実践で紹介しました。そうしたら終わった後、都内の大学の法学部に通う学生さんが近寄ってきて、「法律や制度ではなくて、いじめをなくす手立てがあるんですね」って、私に声をかけてくれました。とっても嬉しかったです。さあ、今までいじめをなくすためにどうしたらいいかっていうことで、法律を作ったり、道徳を強化したり色んなことをやってきました。でもね、「いじめをなくすためにはどうすればいいのか」って今みなさんに聞けば似たような答えがくるんじゃないかな。ちゃんと教えないといけない。「いじめはだめなんだよ」って。ちょっと進んだ人は、「人権侵害だからね。」「自分がされて嫌なことは他の人にもしてはいけないんだよ」、なんてことをきっと言うかもしれません。そんなの昔から言っています。でもなくなっていないんだから、そこでえいっ、発想を変えちゃえっていうんで、すごい難しい問題を出します。

「いじめをもっと増やすためにどうしたら良いか」「いじめをもっとひどくするためにどうしたら良いか」。これをちょっと考えてみよう。どうでしょう…。ムリですよね。みなさんいい人だもんね。大学でこの問題出したら、「靴の中に画びょうを入れる」とかって言う人がいたんです。「それは方法だろ、いじめる方法じゃないんだよ。どういう状況を作ったらいじめがひどくなっていくか考えてみよう。」まあ、こんなことを言ったわけです。ちょっと 10 秒ぐらい考えてみようか…。時間があれば、4 人ぐらいで相談して、『いじめ推進プロジェクト』みたいな感じでやってみて下さい。…で、私は考えました。ホントはいい人なんですっよ。でも、無理して考えました。「どうすればいじめがひどくなるか」。まずね、いじめをするんだってエネルギーが必要なんですよ。いじめをするワケがどんどんどんどんふくれあがって、エネルギーが満タンにならなければ誰かをいじめてやろうなんて、思わないと思います。いじめてやろうと思ったって、いじめができない環境だったらいじめはできません。『いじめが広がる環境、見えにくい環境、止めにくい環境』こういうのがあると最高ですね。さらにいじめの方法技術が進歩してどんどんどんどん普及されていく、宣伝されていく、みんなが学び合って力をつけていく。「そんな方法があったのか」ってね。さらに仮にいじめが発覚したとしても、「ボクは間違ったことはしていません。だって、アイツがこうだからしょうがないでしょう。」「なるほどそりゃあ仕方ないな」こういう感じですね。そういうことが常識っていう世の中になればいい、さらに加えて、先生の指導でいじめをどんどんどんどん悪くなっていく、こうなったら最高ですね。先生に言うと悪くなるのだから、絶対言わなくなるじゃないですか。でも、悲しいけれどこれが今の現実だっていうことです。なんでこんなこと考えたかというと、私がみなさんにこうやっていじめをひどくする方法を覚えて学校でいじめをひどくするためにがんばるんだよってそういうことじゃないですね。みなさん賢いからわかると思いますが、逆説で考えてそのことをとことん追求していけば、その逆をしていくことによっていじめはなくなる方向に進んでいくということなんです。

まず一つ目、いじめのエネルギーに関わって、いじめをすることで解消しなければならない事情が子どもに起きる、不安やストレスです。いじめがあっても批判できない子ども集団、言ってもムリという諦めがあって、しらけていて冷たい関係、実際に自分たちでいじめを解決したという経験がない。それから逆にいじめの方法を学んだり、容認する文化がこの社会にある、例えば人の容姿を笑いの種にする、背が高い低い髪の毛の色がこうだ、目が大きい小さい、もう色々…。おまけに熱湯風呂に入って苦しんでいる姿を見て笑う、おまんじゅうを甘いと思って食べたら、唐辛子が入っていてすごく辛がっているのを見て笑う。あの芸人さんたちはプロですから、怪我がないようにやっているし、打ち合わせでやっているし、いいのかもしれないけれど、そのことをそのまんま真似していく、まだ色んなことが十分に理解できてない子どもたち、笑うことによって自分のストレスが解消されれば、最高だよね。そしていじめをしやすい環境、孤立無援無関心自己責任…、自己責任っていうのはなんかポジティブな感じに聞こえるかもしれないけれども、責任

ののがれと責任の押しつけだからね。自分には責任がないよっていうために誰かの責任にするときに使われている。それから教師や大人や認識不足や対症療法的な指導、対症療法的な指導って何かっていうと、よくいわれるやつ『呼んで説諭、厳罰』これじゃダメよっていうわけです。この問題を教えてくれたのが中学一年生の女の子でした。読みます。これはみなさんのレジメにも書いてあります。

『いじめを無くしたい、これは誰もが思うことだけど、願望だけでいじめがなくなったら苦労はない。やっている方は相手のことなどなんとも思ってない、その人が嫌いだという理由もあるだろうが、いじめの理由の 8 割はストレス解消、別に誰だっていい、自分のストレスがなくなればいい、いじめをやる人は自己中である。いじめられている人は心の底から苦しんでいるのに、しかし困ったことにいじめられている人はそのことを話さない。本当は話したいのに、助けを求めているのに、大人たちのほとんどはいじめられたら言ってね、助けになるからというが、いじめられている人は言わない。いや、言えないのだ、なんで言えないか、先生や大人たちに言うと助けになってくれる、そしていじめた人にもういじめてはいけないという、そしていじめた人は「ごめんなさい」と謝る、これで一件落着という気がするが、そんなことでいじめは収まらない、昔はこれで大丈夫だったのかもしれないが、残念なことに最近のいじめはとても悪質だ。いじめた人はとりあえず、ごめんなさい、まるで心から言っているような顔で謝る、それで大人は許してしまう。しかし、大人の気づかないところでいじめはまだ続いている。大人の前でいい顔していじめた人は、誰も見ていない裏で「お前、ちくっただろう」といじめは前よりも強力になる、それを恐れている。今のいじめられた人たちは誰にもワケを話さずにストレスをため込むのだ。いじめそれはみんなが関わっていることであり、みんなで関わって無くしていくべきであると私は思う。』

どうですか、みなさん。先生に言ったら何とかしてくれると思って助けを求めたら、その先生がむしろいじめをどんどんどんどんひどくする方向に動いてしまったなんて、こんなに悲しいことはないですね。でも実際はやられているんじゃないかな？はい、おさらいです。よくあるいじめ指導。いじめが起きたら→被害生徒に事実確認をする＝「どんなことがあったの？」→それに基づいて加害生徒などに事実確認をする＝「お前やっただろう」→、グループでやっていれば「みんなちょっとこい」と呼び出して叱る→「やっただろう」→「すいません」→「すいませんじゃないぞ、いじめは犯罪だ！いじめ防止対策推進法第四条違反」とまでは言わないかもしれないけれども、とにかく怒る。そうしたら「先生本気になって怒っているからヤバイ」と思うかもしれません。それで、「親にも来てもらわないといけないな」→「それだけはやめて」とか言いながらも、「いやダメだ」と言って家庭にも連絡をときにはし、最後は被害者に謝罪する。謝罪の場で「なんか言うことあるだろう」っていじめた子を促します。

いじめた子「いじめてごめんね」

教師「いじめてごめんねって言っているぞ、どうする？」

いじめられた子「もうしないでね」
いじめた子「はい」
教師「じゃあ、これで終わりだ。はい仲直り、握手。ハグ」
って言って一件落着…。かくしてさっきの女の子の作文になっていく。こういう指導をしていたらダメだよと言いたいのです。けれども、実際は単に繰り返されるだけじゃなくて、どんどんどんどん悪くなっていくのだから困ります、どういうふうに悪くなっていくかというと、それは二つ、さっきの子は理由があっていじめたわけです。いじめによって解消しなければいけないストレスがあったわけです。ストレス解消でやったのだけれどもバレちゃった。もうしないってなったら、どうやってこのイライラやムカツキを解決するのかってことになっちゃいます。解消する別の方法を見つけようとするでしょうね。いじめ以外の方法だとドアけったり、窓とガラスをと割ったりするかもしれないですけれども、中にはバレないようにといじめようとする人がいるかもしれないけど、そうなるといじめは見えにくくなります。見えにくくなるっていうのは、教室でやっていたいじめをトイレでやるようになるっていうこともあるかもしれないけど、違いますよ。それだけじゃありません。見えにくくなるって言うことは、みなさんもきっと経験があると思いますが、例えば、授業中に「デブ」とか「ブタ」とか「ブス」とかね、ひどいこという男の子がいるわけですよね。それをＡ子ちゃんは学級委員だから注意したわけよね。「宮下くん、授業始まっているから、おしゃべりやめてよ。みんな迷惑しているし」と言ったら「ハァッ？うるさいデブ」って言ってきた。それだけじゃなくそのあとも「デブ、デブ、デブ」と言い続ける。傷つきますよ、容姿のことでからかわれたら、「お前皆に嫌われてるぞ、学校来るんじゃねぇ」って言われたら、すごく傷つきます。向こうで宮下君たちがと集まって喋っているとします。Ａ子ちゃんは昨日もそう言われました。死ねって言われました。辛いです。だけど、職員室行かないとならないので、どうしても宮下君の前を通らなくちゃいけない。前を通ったら昨日はものすごく言われたんですよ。でも今日は通っていったら、面と向かっては言わないんですよ。誰か別の人とささやいていると声が聞こえてきました。「死ね」「デブ、ブス」「死ね、ブタ」聞こえてきました。また、私のこと言っているな、これだけで辛いです。「ねえ、今私のこと言ったでしょう。やめてよ、それ」とかって、抵抗します。そうすると「ハァ…？、言ってねえし、何、言っている決めつけているんじゃねぇよ、バーカ。また先生にチクるんだろ。だから、嫌われるんだよ」こういうふうに言われて、傷つく…。なかには「そんなの気にしなきゃいいんだよ」と言ったりする先生とか、大人とか友だちとかいるかもしれません。でもね、そんなことないよ。辛いよこれ、やられたことある人は分ると思うけど、私もつらい思いをしました。朝満員電車に乗ったときのことなんですけれど、そのとき大きい荷物持っていたから網棚にあげたんです。そして何とかしてこの荷物の近くから離れないようにしようって入り口付近で必死にしがみついていたんですよ。そしたら、次の駅でどどどって人が入ってきたの。そしたらある人がね、グンと体当たりのようにして入ってきたから、こりゃまずいと思ってちょっと身をかわしたんです。

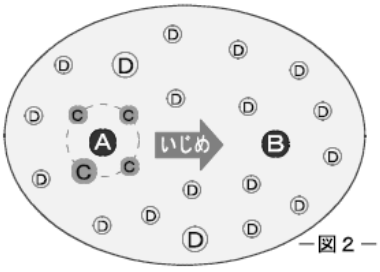
そしたらその人は体当たりを交わされたカタチでズルって中の方に入っちゃったの。そのことが相当カチンときたらしいです。そのあと私のそばで囁くんですよ。こうですよ。「ジジイ」。まあ、ジジイだからしょうがないですけれど、「ジジイ、死ね。すぐ死ね。クズ。聞こえてんのか。コラこっちへ向けよ。何笑っているんだよ。クズ、クズ、クズ…」。こやってずっと言い続けるんです。よっぽど振り向いて「あんた誰に向かって言っているの？私に言っているの？」って言おうかなっていう衝動に駆られました。でも、乗客のトラブルで電車が遅れたら大変と思って、じっと我慢していたんですよ。でもね、この「クズ、クズ、クズ…」って言うのが耳に入ってくると、段々、心がね、ザラザラしてくるんです。苦しくなってくるんです。もう耐えられないから途中で降りようかなって思ったほどでした。そうしたら、その次の駅でその人降りたんでホッとしましたけど、子どもが学校でブタとかデブとかブスとか言われ続けるのも同じだと思うんです。「気にしなきゃいいじゃん」とか言えないよね。言われている方からすると毎日毎日続いたらたまりません。実際には言われなくてももうダメなんです。一回それが傷として心に残ってしまったらもうダメなんです。たとえば、あそこにいじめっ子君たちが集まっているのが見えるとします。いつもひどいことを言う子たちです。何かおしゃべりしている感じで笑い声も聞こえます。笑い声の合間にこっちの方をちらっと見る。そうしたら「あ、また私のこと話題にして笑っているんだな」って思えちゃうでしょ。これは辛いですよ。もう学校行きたくなくなっちゃうよ、きっとそういう経験したことある人、この中にもいると思いますけど、こういう方法でやれば、先生も注意できなくなっちゃうんです。だって「オレたちオマエのことなんて話してないし…」って言われたどうしようもないでしょ。ホントに関係ない話していたのかも知れないしね。さっき言ったように、いじめる子の心に寄り添わないで、現象だけ抑えるような表面的指導をしていくと、こういうことが起きるんですね。これが悪くなることの一つ目です。

二つ目は、いじめをする子どもが心を閉ざして関係が悪化するということです。最初の段階だと、「オイＡ、Ｂをいじめただろう」「はい」「『はい』じゃないんだ、ちゃんと謝れ」「はい」って素直に言うんですが、何回も何回も繰り返してくると、「Ａ！こっちこい」「なんスか」「なんスか、じゃない、いいからこっち来い」「だからなんスか」「何でもいいからこっちこい」「ハァ…？」って、段々険悪になってきます。「お前、A 子ちゃんいじめただろう」「ハァ…？いじめてないし、決めつけているんじゃないよ。バーカ」とか「バカとは何だ、誰に向かって言っているんだ」とかなってバトルに発展しちゃったりします。「でもな、Ａ、お前にもいろんなワケあるんだろ？先生には何でも話してみろ」。そんなこと言ったってこんな関係なったら話すはずがありません。子どもの心のドアはいったん閉じられたら大変なんです。この教室にドアがあって今は閉まっていますが、ドアのノブは内側にもついていますし外側にもついていますから、どっちからでもドア開けられます。でも、子どもの心のドアにはノブがその子の側にしかついていないんですよ。だから、その子がこの先生なら話してもいいなって思えるような

先生じゃなかったら話さない。今のような関係続けていたら何でも話してみろと言っても話しません。怒鳴ったりして指導しているんですけれども、一向にいじめがなくならなければ、この先生に言っても事態は解決しないって信頼を失うと、一般の子どもも関わり合うのが嫌になって心を閉ざして本音を言わなくなります。そうするとクラス全体が活力を失ってくるんです。さっき言ったいじめを増やすためにの中にピッタリくるじゃないですか。いじめが起きても何にもできないクラスになってくる。こんなふうにしていじめはだんだんと『モンスター』になっていく。なんでこんなことが起きるかっていうと、大人の中にあるいは教育現場の中に間違った思い込みがあるからだと私は思っています。

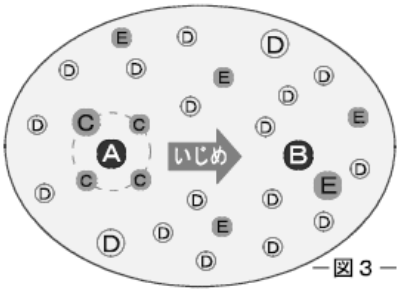
その間違った思い込みの一つ目。それは「いじめは起きないのが当たり前なのに、それが起きるということは何かがいけないからなんだ」という思い込みです。みなさん不登校のことも勉強したかと思いますが、学校っていうのは行くのが当たり前なんだという「常識」のなかで、不登校になる子がいたとしたら、その子はどっかで何かが間違えてしまった特別な問題を抱えた子なんだと見られちゃう。だからあるべき本来の状態に戻させようと考えます。あるべき状態に戻す、つまり何とかして登校させようと大人たちは考えるのです。いじめもそうです。人はみんな仲良く元気よく…、があるべき姿。だからいじめを起こすなんておかしなことなんだ、だから早くいじめのないあるべき状態に戻さなくちゃいけない。こういう認識です。

誤った指導がされる理由の二つ目、いじめの問題をいじめるＡ君といじめられるＢ子ちゃんの一対一の関係だけでとらえているからそういうふうになるんです(図１)。だから、両方を同席させて和解させ「握手！」で、一件落着ということになる。つまり反省と関係修復が目標になっています。加害者に非を認めさせて、被害者に対して謝罪をさせて和解というパターン、それでついでに一緒に関わった子ども達がいれば、お前たちも同罪だって言うことでやる。直接の当事者の間で起きた問題としてこのいじめの問題を処理してきたということになります。これを一対一の関係、つまりいじめる子Ａといじめられる子Ｂだけの関係だけじゃなくて、実はこのいじめが起きているときっていうのは、もっと多様な人間関係のなかで起きているよっていうことを、森田洋司さんが四層構造として説明したんです（図２参照）。Ａが加害者、Ｂが被害者、Ｃが共犯者(同調者)、Ｄが傍観者(観衆)…これをドラえもんの登場人物でいうと、ジャイアンがＡ、のび太がＢ。ジャイアンがのび太をいじめます。Ｃのスネ夫もジャイアンと一緒になってのび太をいじめます。これを加害者(Ａ)、被害者(Ｂ)、同調者とか共犯者(Ｃ)とか言います。そしてここまでくればあと一人、あの子がいませんよね。そう、しずかちゃん。しずかちゃんは外にいて事態を見守っている、観衆とか傍観者(Ｄ)っていったりしますね。いじめを考えるときにはこの四者を考えなければいけない。四者ではカギを握っているのはしずかちゃんだといわれます。さっきの図２を見て想像してもらいたいんですが、ジャイアンがのび

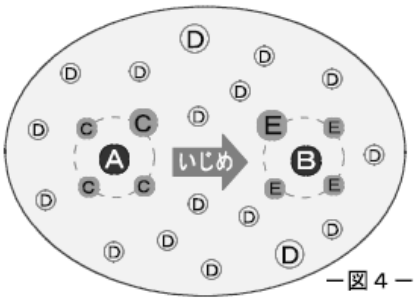


－図２－

太をいじめます。スネ夫も一緒になっていじめます。しずかちゃんはそれを見ています。そうするとしずかちゃんはいじめをしていないんですけれども、のび太の眼には自分以外の三者、しずかちゃんも含めて自分のいじめられている様子を見て笑っているように見えます。実際にはしずかちゃんは一人ではなくてクラスの多数、だからいじめられる子が一人、二人の場合もあるけど、とりあえず一人、そしていじめている子がいてその周りにはやし立てる子がいて、さらにそれを眺めているクラスの残りの30 人がいたとしたらどうでしょう。みんなボクがやられていることを知っているくせに面白がってみているだけで誰も何もしてくれない…。そう思ったらどうでしょう。私は絵というのは書けませんけど、ちょっと想像してみてください。暗闇の中でスポットライトが当たって、そこにいじめられているボクといじめているAやCがいる。辛くて周りを見回すと、見ているだけで何もしてくれない人たちの目、目、目、目…。『傍観者たちの目』が光って見えるんです。それは、ボクがみんなの前でさらし者にされているっていう無力で惨めな姿です。そういう「傍観者」に対して、大人たちはこう言います。「いじめを知っていて注意しないのはいじめているのと同じだよ」。確かにそうかも知れません。でも、当事者の子どもからすればどうでしょう。「止めるなんてそんなのできるわけないじゃん」「なんかいじめを止められないでいる自分が悪者みたいで辛い」って思うでしょう。実際にいじめの現場にいた子で、「いじめを注意できなかったかボクはダメな子だ」ということで、命を絶ったというケースもあるんです。注意できないという自分が苦しくならないようにするにはどうすればいいのでしょう。「知っていないんだ」と思い込むことです。そうせざるを得ないでしょう。だって知っていたのだったら、注意できない自分が辛いじゃないですか。だから見て見ぬふりじゃなくて、見えていない感じないようになっていくということになります。私はこの四層構造は確かに画期的な指摘だと思います。複雑ないじめの構図を明らかにしたからです。だけど傍観者に対して、注意しなかったらいじめているのと同じだよと、こういう言い方をしちゃダメです。この四層構造の考え方に止まっていると、いじめは解決に向かっていきません。どう考えれば解決に向かう考え方ができるのかっていうんで、私は「いじめ解決の六層構造」というのを提案したいと思っています。みなさんがもし先生になって、教育現場、教職員として教育現場に入ったらこのことをちょっと心にとめておいて下さい。まず、AがいてBがいて、その間にいじめが起きたときに、Aを加害者、Bを被害者こういうふうに呼びますね。でも、実際はAは一人ではなくで、一緒になってBをいじめる共犯者っていうCがいます。そしてその周りに傍観者…。これはさっきの四層構造、でもね、よーく見てみると



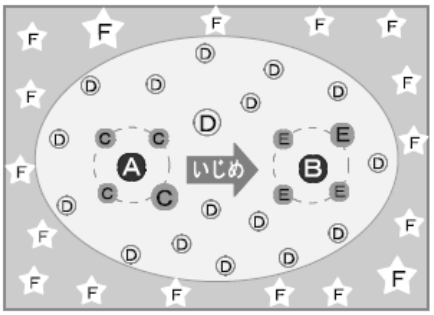
―図３―



―図４―

この傍観者よ呼ばれるＤの人たちの中には、見ていて辛いなって思っている子もいるわけです。Ｂさんかわいそうって思っている子もいるわけです(図３)。私はその子たちが思っていることがＢに伝わったら状況は変わると思っています。これを「傍観者」じゃなくって「隠れ共感者」というふうに呼びたいと思っています。この潜在的な「隠れ共感者」をこのＢさんが認知できるように「共感者」として登場させてあげることが重要です。これは担任にしかできないこと、教師じゃなきゃできない、しかし教師ならばできることなのです。親にはできないのです。教師ならばできます。後でちょっと詳しくやりますが。これで５層構造になりましたね(図４)。でも、私は６層構造って言ってますよね。

もう一つ、６番目は何でしょうか？実はこれまで出てきたＡ～Ｅは全部教室の中の子どもなんです。いじめ自殺事件なんかが起こると、テレビのニュース番組やなんかで、評論家の人や、タレントの人達が、今の子どもは恐ろしいとか、逃げればいいとか、色んなことを言いますね。でも全部子どもの世界の中のこととして、話しています。でも思い出してください。いじめ方を教えてくれたのは誰ですか？その子がいじめをしたくなるような状況に追い込んだのは誰ですか？ジャイアンがのび太をいじめるときに言っている言葉知っているでしょ。ジャイアンはジャイアンのママから。ジャイアンはいいよね、剛田武(ごうだたけし)っていう名前があるからね。ジャイ子は可哀そうだよって言ったら、「先生、ジャイ子はもし本当に剛田○○っていう名前がついたとしたら、同じ○○という名前の子がいたらそのことを理由にいじめられるかもしれないから、ジャイ子っていう名前にしてあるんだよ。」って教えてくれた人がいて、「お～っ」と思いましたけど。ジャイアンが「タケシ、まったくあんたはいつも遊んでばかりいて、勉強もしないで！こらっ！待ちなさい。遊んでばかりいないで家の手伝いしなさい！」とかって言って、ママがジャイアンを叱る。ジャイアンは傷ついて、「くそ～！」って思います。そこにのび太が来た。「のび太～！」って追っかけてボコボコっていじめます。理由は？って言うとそれは、のび太のくせに。「のび太のくせに」っていじめられるんだよ、かなわないよね。でも「のび太のくせに」なんです。ジャイアンがいじめをしたくなるような、イライラやムカツキの原因はのび太にはなくて、そのときはママにあった。でもね、そういう原因は学校のいじめっ子の中にも、ちゃんと見ればあるんじゃないか、それは。私はそういうのを「Ｆ」って呼びたいと思います。いじめる方法を教えてくれたり、いじめをしないと解決できないくらいの、イライラやムカツキを子どもの中に湧き出させているものがある。それが今日のいじめの状況を作っている。そういう「子どもに影響を与える全てのもの」、これをＦって呼んでいます(図５)。じゃあこのＦっていったい何か？実はこれを考えるだけで、授業が１時間必要になります。でもなかなか日本では、Ｆを真剣に考えましょうっていう雰囲気には



－図５－

なっていないのですが、そういう努力をしている人達もいます。そして国連子ども権利条約っていうのが、1994 年に日本でも批准されたのですが、その中で５年に一度、日本の国の子どもの状況を国連に報告しないといけないってなっているんです。それを受けて国連は、国連子どもの権利委員会は、日本政府に、こういうところ直しなさいって、いっぱい指摘しています。このＦに当たるもの。国連子どもの権利委員会はこう言っていますよ。「高度に競争主義的な学校環境が、就学年齢にある子どもの間のいじめ、精神的障害、不登校、登校拒否、中退、及び自殺に寄与しうることを懸念する」。これを言ったのは。国連子どもの権利委員会のメンバー。日本に住んでいるわけではありません。外国の人たちです。その人たちで話し合って日本政府に勧告をしている。様々な報告書をもとに研究した結果の勧告です。参考にする報告書はもちろん日本政府のものだけじゃありません。市民レベルのＮＧＯもいっぱい子どもの状況を国連子ども権利委員会に報告しているわけです。それをもとに勧告を出しているのです。「驚くべき数の子どもが情緒的幸福度の低さを訴えていることを示すデータ、並びにその決定要因が子どもと親及び子どもと教師の間の関係の貧困さにあることを示すデータに留意する」。これも国連子どもの権利委員会勧告内容の一つです。１５歳の子どもに、自分を孤独だと思うかどうかという質問をしたら、これユニセフの調査だったのですが、自分は孤独だと思っている子が、日本は２９．８％。約３人に１人、１５歳の子どもの約３０％が自分は孤独だと思っているんですよ。これ、ＯＥＣＤ諸国の中で断トツですよ。断トツ １ 位です。他にも断トツ１位的なものがありますよね。大学の学費の高さ。これもそうらしいですね。日本はね。逆にうんと低いのもありますよ。教育にかける国家予算。これは断トツ最低で「国家支出が少ない」って注意を受けています。そういうことも、国連子どもの権利委員会は言っています。もっと金かけろよ。そういう状況の中で、まだありますよ。親が子どもに過度な期待をかけすぎて、それが虐待や何かに繋がっているっていうことも言っています。こういうＦの問題を考えなければダメだ、っていうのが私の考えです。子どもがイライラやストレスを感じて、もって行き場がないほど苦しみを閉じ込めていて、そしていじめっていう方法でどうにか解消して自分を保っている…。これはずっと前からあることなんですが、そんな状態に子どもをしておいて、そうなるのは子どもが悪いんだと大人が言っているとしたらムカつきません？栄養大学で学ぶみなさんにいうのは恥ずかしいですが、新鮮なキュウリを塩水につけておいたらどうなります？漬物になるに決まっていると思いません？どんなに新鮮でイキイキしているキュウリでも塩水につけておいたら漬物になるんです。子どもだって、現代社会という「スープ」の中で生きているわけですから、この影響をいっぱい受けているわけです。影響されて育つわけですよ。子どもだけ先に悪くなる世の中なんてないんです。塩水につけられたキュウリが漬物になったからといって、見ていた大人たちが「こら、キュウリ。漬物になってはいけない。漬物になったら犯罪だ」って言ったってそりゃムリです。漬物になりますよ。こんなバカなことをやっているのが日本のいじめ対策じゃないかなって私は思っています。Ｆの問題をもっと考えないといけ

ない。しかしこのＦの問題の解決は簡単じゃない。じゃあそれまでは、Ｆが変わるまでは、いじめで子どもが死んでもしょうがないか、そんなことは言ってられない。それを変えてくれるのが私がさっき言ったＥ(共感者)です。

それともう一つ声を大にして言いたいことがあります。今いじめが起きるという、そのこと自体がすごく問題だと思っている人がいます。私はいじめが起きることは問題じゃない、むしろいじめはどこにでも起きると考えるべきだ、私はそう思うんです。言っておきますけど、いじめなくする方法、あるんですよ。学校でいじめゼロにする方法はあります。もしかしたらすぐに思いついた人がいるかもしれないけど、それは簡単です。子ども同士を接触させないようにすればいいんです。絶対に言葉を交わさない、触れあわない、こういうふうにすればいじめは起きません。だっていじめは対人トラブルなんだから、対人関係を作らなきゃＯＫでしょ。いじめは起きません。でも、そんなふうにして、学校卒業して、子どもの何が育つの？むしろ初期のいじめは起きて当然、それは子どもが社会性を身につけるための大事な経験。問題なのは起きて当然のいじめを深刻なモンスターにしてしまうことじゃないんですか。さっきみたいな。やった子を呼んで、厳しく…。これで終わらせるからダメなんです。学校がすべきことはいじめを起こさせないことじゃなくて、子どもにいじめ解決の力をつけることだと思います。

大人、教師の役割は何か？やっぱりね、子どもの力で解決できる。対人トラブルを子どもが解決できるようになる。そういう力をつける。道筋をつける。解決困難なトラブルにいじめを発展させない。事件にまで発展させない。子どもを重大ないじめの犠牲者にしない。そのために何をすべきか、何ができるか…。大人がいつもどこでもずっと見張っていて、いじめを取り締まっていけばどうなるかと言ったら、子どもはいじめ解決の主人公になれず、結果として解決の力を何にもつけずにすんでしまう、解決の力をつけることができないまま学校生活を終えてしまうわけです。こうして何も学ばずないまま社会に出されてるんです。社会にいじめありませんか？あるじゃないですか。大人だっていじめで死んでるじゃないですか。私たちの町の治安を守ってくれる警察のなかでも「いじめ」があるし、この国を守ってくれるという自衛隊のなかでもいじめがあります。海上保安庁のなかでもありますし、一般の会社の中にもあります。そんないじめにどう立ち向かっていくのか、それを一体子どもたちはいつどこで学ぶのでしょう？「今でしょ！」、じゃなくて学校でしょ。それを私たちがしなけりゃいけないんじゃないかなと思います。実際にはそういうのを学ぶチャンスを持たないまま世間の荒波の中に放り出されて、溺れてしまうような状況を私たちが作っているとしたら、こんなひどい話はありません。

もう時間が残り少なくなってきてしましました。こんな話をしていると、偉そうなこと言っているけど具体的にどんなことすればいいって言うんだ。と思っている人もいるかもしれません。ですから、最後に一つの実践を紹介します。私の中学教師とき代の最後のクラスのお話です。スライドを見てください。

ハイ、問題です。私は何の先生だったでしょうか？

これ日本地図なんですけどね。これ実はお天気の授業やっているんです。そうです、理科の先生だったんです(笑い)。さあ、最後に持ったクラス、久しぶりだったのですごく楽しみで担任やりました。もうだって教師生活最後の１年ですよ。９年間担任してなかったの。校長先生に担任させてくださいと言って、１年生を持たせてもらいました。すごい嬉しかったですね。入学式の日「一番嬉しそうな顔していたの宮下先生でしたね。」って同僚の先生に言われたほどウキウキルンルンだったのですが、始まってみたら大変でした。１年の終わりにクラス代表がこのクラスのまとめを文章にして学年集会で発表したのがあります。読みますよ。

「一学期の４組の授業妨害やいじめなどが多く、クラスがまとまっていませんでした。授業も荒れていて、注意されても私語が止まらず、頭上には紙ボールが飛んでいました。学年でも学級崩壊をしているクラスとして有名でした。ときが経つにつれていじめがどんどん増していく一方。特定の人にあだ名をつけてからかってみたり、授業中に人の悪口を書いた紙を回してみたり。私は早く２年生になってクラス替えがしたい。もうこんなクラスはこりごりだ。そんなことを考えているうちに、学校に通うのが段々苦痛になってきました。」

どうしようもないよね。よく学年目標とかにいじめのない学年。けじめのある学年とかいうのがあるじゃないですか。この４組は真逆の状態、いじめのある学級、けじめのない学級、そういう状況でした。みなさんだったらどうしますか？私は、しくじり先生という番組の真似みたいに「はい、次のページ！」じゃないですけど、こんなことやっちゃいました。いじめているＡ君を呼ぶんです。「ダメじゃないか！それいじめだぞ」「わかったか」。そうすると「はい」って言うんですね。これ今日のお話の最初に言いましたよね。覚えてますか。「すればするほど悪くなる指導」です。呼んで説諭、厳しく叱る。叱られるＡ君は心のドア閉じて開かなくなっていきましたよ。でも私が強く言うととりあえずＡ君がシュンとなるので、一件落着風にみえます。指導したつもりと、従ったふり。わからせたつもりと、わかったふり。こうなるわけです。その陰でどんどん問題が醸成されていくわけです。もう一つありましたよね。すればするほど悪くなること…。いじめが見えにくくなるっていうのでしたね。見えないところでいじめる、いじめとわからない方法で…って言ったと思いますけど、「ブス」って言わないでＡＢＣのＢって言う。「デブ」って言わないでＡＢＣのＤ。「ドブ」って言われた子もいました。Ｄが二つになっちゃいますね。そこで数学で習ったんでしょうか。Ｄ１、Ｄ２ってなりましたね。「ブス」の他に「ブタ」っていうのもありましたから、Ｂ１とＢ２。こういう隠語と使ってやると、先生わからないですよ。「ランランルー」っていう隠語があったよね。「死ね死ね消えろ」っていう。ネット上で使われていたやつですけど。「ランランルー」なんか楽しそうじゃないですか。でも知っている子からしてみれば、「死ね死ね消えろ」って言われているんだから、とっても辛い。これで見えにくくなってきました。まあ、対症療法で事態はどんどん悪化しているわけです。訴えがあったら加害者を呼んで説諭。いじめは繰り返され、被害者は口を閉ざして、加害者は心

を閉ざす。クラスが暗くなっていて、活力をなくしていく。最悪のシナリオの通りです。担任として本当は何をすべきだったのでしょうか。お医者さんのことを考えて下さい。私、実はみなさんに言うのは本当は恥ずかしいのですが、勇気を出してカミングアウトします。私実は「痛風」なんです。足なんです。痛いんです。これ、風がふいても痛いっていうのが痛風。理由は尿酸値が高くなってくると、これがいけないんですよ。まあ、食べ物に原因があってプリン体の多いものを食べちゃいけないって言われるけど、ちがうらしいんです。みなさんプロですからね。お酒飲みすぎが尿酸を作り出すんです。それがよくないんですよ。わかっているんです。痛くてしょうがないので医者に行きました。でもね、これ痛くなっても１週間したら治るんです。医者に行って「痛いんです！」と訴えたときに、「痛風ですね。」と言われ「１週間すると治りますよ。」でも「食生活を直すしかないですね。」ってさらっと言われたらムカってきますね。痛みなんとかして治してくださいよって思います。やっぱり医者だったら症状を和らげる対処をしてもらいたいじゃないですか。痛み止めを打って欲しいですよ。薬が欲しいです。でもそれだけやっていたんじゃダメですよね。痛みの原因の究明と根本治療をしないといけない。だけれども、痛みの原因と究明ばかりやって、根本治療やるからといって、あと、一週間痛みを我慢しろというのも、ひどい話。両方必要なんです。担任の場合はいじめに苦しむ子どもの心を和らげること。話を聞くこと。苦しい思いを受け止めることサポーターをつけること。これがさっき言った、共感者です。サポーターというのはどういうことか。そうやって、「デブ」とか「ブス」とか言われて、心が痛んでいるＢ子がいました。「先生もう私ダメ。」「どうしたんだ？」こんなやりとりでいっぱい思いを語ってくれました。とにかく話を聞きました。そして、でもね。「お前だって…」なんて絶対に言わない。「辛かったね。」「そして君がこんなに辛い思いしているのをわかってくれる子、クラスにいない？」「Ｅ子がいる。」「Ｅ子は小学校のときにやられていたんだ。だからわかってくれると思う。」「そうか、じゃあＥ子にこの話していいね？」っていってＥ子を呼んできて、「こんなふうにＢ子が辛い思いをしているんだよ、ねえ、Ｅ子、Ｂ子のサポーターになってくれないかな。」「ダメだよ、先生、私注意できないもん。そんなことしたら私がやられちゃうもん」「大丈夫、いじめは止めなくてもいいんだよ。とにかくいつもＢ子の側にいて思いを分ってあげてほしいんだ」「先生はいつも一緒にいてあげたいんだけど、理科の時間と朝の会と帰りの会とお弁当のときしかいられないでしょう。掃除のときもいられるけど」「でも、キミは女の子だし、できるだけ一緒にいてあげて欲しいんだ。そして、どんなにＢ子がひどいことを言われているのか、先生に伝えてほしいんだ」って言いました。これ結構重要で、私がＢ子に、「Ｂ子どうだった？」「うん大丈夫」こういうふうに言います。「大丈夫か？」と言えば返事は「大丈夫」。この大丈夫という問いかけほどひどいことないよね？だいたいね、みなさん「大丈夫？」って誰かに聞かれたら、「全然ダメ、大丈夫じゃない」って応えることあります？ほとんどの場合、「大丈夫？」って、聞かれたら「大丈夫」、額から脂汗が出るほど痛くても、苦痛で顔が歪んでも「だ・だ

・だ・大丈夫」ときっと言うと思います。「大丈夫？」って質問には「大丈夫」って答えがほとんどなのです。Ｂ子も「大丈夫」って言いました。そして、Ｅ子が「先生、大丈夫なんかじゃないよ。あれひどかったんだよ。Ｂ子はよくガマンしてる。私だったら絶対ガマンできない」と言うんです。そのことをＢ子の思いをＥ子が代弁してくれる、これすごく大きいと思います。Ｅ子にはもう一つお願いしましたよ。『もしこれまずい、大変なことになると思ったら、Ｂ子のガマンも限界と思ったら、Ｅ子、誰でもいいから先生を呼びに来て、先生たちは皆このこと知っているから、必ず誰か呼びに来てくれ』そうすると、Ｂ子は、もし、自分の力じゃあどうしようもない大変な事態になったときには、必ずＥ子が呼びに行ってくれるという、セーフティーネットというか安心が得られます。サポーターってこんな感じです。これ結構いいんです。共感者を付けるでしょう。サポーターを付けるでしょ。Ｂ子がやられたらＢ子の周りにサポーターつける、１人じゃなくていいわけ、そして別なＳ子がやられたらＳ子の周りにもサポーターをつける、Ｔ男がやられたらＴ男の周りにもサポーターつけるでしょう。そしたらサポーターがどんどん増える。サポーターになると、被害者の立場になるわけ。そうなるともう、世間でいう「傍観者」ではありません。傍観者って言うのは外側にいて眺めているだけの人のことをいうわけだから、Ｅ子の場合はそうじゃないわけ。Ｂ子の立場になって「もうやめてほしいよ」って思うようになる。サポーターが増えるってことは「やめてほしいよ」って強く思う人がいっぱい増えるっていうこと。この状態では、誰がサポーターってみんなの前で明らかにしていないんですよ。「はい紹介します。Ｂ子のサポーターのＥ子さんです。」なんて紹介したりしません。サポーター会員バッチみたいなものもつけません。だから知っているのは、その数人だけなんです。こうやって一人ひとりと関わっていくと、私にはサポーターグループがどんどん増えているのが分かる。最後はねサポーターの方がいじめる方より数が多くなってきちゃうんだ。いじめって、多数が少数をいじめないと意味がないのに、その数がだんだん逆転してくるんです。でも一般の子にはそのことが言えません。誰がサポーターなのかって秘密ですから。もうほとんどの子は「こんなのイヤだ」って思っているよっていうことをみんなの確信にしたいって思いました。

さあ、どうやってそのことを示したでしょうか。これです。意見集を作って読みあったんです。「皆、今の状態では、安心して授業はできないし、いじめで苦しんでいる子もいるし、このクラスどうしよう？」って私が呼びかけました。そして「自分はこう思う」って意見を書いてもらいました。先生の考えを言ってそれに応える『意見集』を作りました。『意見集』は匿名でやります。ただ私のところに出すときには、名前を書いてもらいます。そして「皆に返すよ。読み合おうね」って言います。意見集にするときには、名前は載せません。そして例えば「バレー部」を「バスケ部」に変えるとか、「ボク」を「私」に変えるとかして誰が書いたかを特定できないように工夫もするから安心してね。「おうちの人にも見せてね。」って言いました。『第一集』をみんなで読み合ってまた意見を書いて『第二集』を作ります。どんな

意見が出てきたか、ちょっと紹介します。

「ある人がある人の悪口を言って笑っていたりすると、他の人もそれに乗ってしまう。こそこそ話しているのを見ると、自分の事を言われているのではないかと思う。それがもし自分でなかったとしても、悪口を言われている人は絶対何か陰でいわれているというのは分るし、辛いと思う。」

「クラスのいじめや辛さ、私も経験があるのでよくわかります。やっている人や自分は関係ないと思っている人がいたとしたら、この気持ちは絶対にわからないでしょう。自分がそうなったらどうなるかと一度考えてほしいものだ。受けたいじめはその人の心の傷になります。私も時間がたった今でも何かのきっかけでその辛さが、フラッシュバックしてしまうことがあるんです。それほど辛いことなのです。あのときの辛さは、経験者にしか分りません。そんなとき支えてくれたのは、友達でした。いじめはもうやめて下さい。」

「いじめをしている人達には自分では解決できない何かがあるんだと思う。他人は言えない、分らない大きな問題があるのかもしれない。その事を追及することはできないが、その問題でクラスが荒れてしまうならば、少しでも良くなる方向になるように考える必要があると思う。」

この子は「ジャイアン」に事情があるということを知っているんです。だからこういうことを書く。私たちが、この「ジャイアン」と話をするときにも、頭ごなしに言わないであるときこんなことを言ったことがありました。「おまえさ、こんな事繰り返していたら皆からどう思われると思う」って言ったんです。そうしたら「悪い子だと思われていると思う」と言いました。中学に入ったばっかりの１２歳の子が自分は悪い子だって言っているんですよ。辛かったです。さっきまで憎たらしいいじめっ子に見えていた彼が、本当に迷える仔羊じゃないけれど、苦しんでいる子に見えてきたら抱きしめてあげたいくらい、私は言いました。「お前がやっていることは悪いことかもしれないがお前は悪い子なんかじゃないよ」と。「ジャイアン」はキョトンとしていました。でもこの子の書いたのは、そういうことをちゃんとわかっているんですね。

「『３８人の一歩』を読んでこのクラスのほとんどの人の本音が聞けたような気がします。「私にもいじめられた過去と記憶があり、家族にも相談しましたがひどくなる一方でした。３８人の一歩のなかに有ったように無意識でいじめをする人ややられた側の気持ちも考えずに暴言を吐いたり、先生に言っても「やっていない」の一言で終わらしてしまう子、そんな子はいじめていたことなど、すぐに忘れてしまうのでしょう。人間関係を破壊されてもくやしくてもやり返せない、今でも私の心の深い傷になっていて生涯引きずって生きていく、その心はいじめられた人じゃないと誰にもわかってもらえないことです。」

「やっぱり誰もがいじめはひどいと思い、なぜ人を傷つけているんだろうと思っていたんだ。今回、このようにみんなの意見を集め、冊子にして話し合ったのは初めてだったけど、皆が毎日どんな思いだったのか、これまでどんな気持ちだったか冊子見て初めて分かった。やられてきた人は毎日毎日本当に辛かったと思う。今回話し合いをしたということで、少しでもクラスの落

着き、いじめ悪口がなくなるクラス目標の“みんな優しく・信頼し合える楽しいクラス”に一歩近づきクラスが良くなるのではないかと期待している。」

この“みんな・優しく・信頼し合える・楽しいクラス”は頭文字を並べると「み・や・し・た」になるとってもステキなクラス目標です。これは、クラスの子ども達が学年初めのクラス目標に決めてくれた言葉で、今でも私のスマホの待ち受け画面になっています。

今度は親の意見です。

「最近の傾向として『モンスターペアレント』などの暴力行為・体罰禁止などの教育の方向が間違えていると感じ、中学生という思春期であるからこそ、教育の必要性が高いんです。社会に順応するための教育としても教師・親がときとして手を挙げることも必要でしょうと世間体を気にするあまり、教育の真髄を見失うことがあってはなりません。それでも言うことを聞かず治らない生徒は病院の診断を受けさせるべきだと思います」。

これは私の考えとは違いますが、こんな声も親から寄せられて書きました。色んな考えの人がいるんだよということを子どもに知ってもらいたかったからです。

「３８人の一歩を読ませて頂きました。一人ひとりがしっかりと問題に向き合い考えている様子が目に浮かびきっと何もないクラスよりは子ども達は成長してくれるだろうと思いました。実際辛い思いをしているお子さんは希望に満ちて入学したのに行きたくないなという気持ちと毎日戦っているのでしょうか。何ともやり切れない思いです。友達から『大丈夫。私たちがついているよ』と守られることで救われるなと願っています。今回クラスの問題を明らかにすることは決断が必要だったのではないかと思いますが、一人ひとりの子ども達を大切に思う気持ち、十分に伝わってきました。」

実は決断なんていらないんです。明らかにするのに決断はいらないんです。なぜなら親は知っていからです。子どもから聞いていますから、親のねとワークもありますから…。知らないようで知っているんです。だけど、知っているようでちゃんと知っていないのです。子どもの目を通して一部だけしか伝わっていかない。誤解をしている可能性があるわけです。ところがああ言う「３８人の一歩」という形で子どもたちのまっとうな考えが示されていくと、「ああ、そういうことが起きていていまこうなっているんだ」と安心します。正しく知らせることが必要なんです。雰囲気が変わりました。多くの人が今の状態をいいと思ってない、このクラスをよくしたいと思っている、苦しんでいるのは自分だけじゃない、このクラスの課題はいじめをなくすことと授業をしっかりやること、注意しなくてもいい、でも同調はしないで。受けねらいのいじめやからかいは皆から浮いている、親も自分たちを応援している、こんなことがこの３８人一歩という意見文集を読み合うことで、子どもたちに共有されていったんじゃないかなと思います。

でも、これではまだ道半ばです。だって、誰が自分の意見に賛成している人なのか分りません。みんなそう思ってるみたい。でも、みんな姿を明らかにしていないから実態がない。安心できない。そこで安心に向けた次のアクションが必要になります。この次のアクションはそうやって思っている人が一人ひとりの意思で行動する、先生にやらされるんじゃなくて自分の意志で、そしてそうやって集った同じ思いの人が共同作業で繋がる、例えばいじめ止めようっていうのも共同作業だよ、だけどそれは難しいハードル高いね。共同作業誰でもできる楽しいことじゃなくちゃいけない。そしてその作業の成果がカタチになって見えなきゃいけない。みなさんだったらこういう条件のある、参加を呼びかけるアクション…、どんなことを提起しますか？これは決まった答えがないんです。そのときの子どもとみなさんの状況によってクラスの状況によって創意工夫されるんです。教師という仕事の面白さっていうのはこれなんです。これを考えるのが面白いんです。私も色々考えました。でも、このクラスの場合は、“みんな優しく・信頼し合える楽しいクラス”こんな素敵な学級目標がある。これを黒板の前にほらあるでしょう。学校目標“友情・努力・勝利”とかあるでしょ。白い紙に筆で書いて教室の前に貼ってるヤツ。ああいうんじゃなくてもっときれいにみんなでやったよって思える、手作り風のやつを作ってみたいなって思いました。「みんな今週の木曜日と金曜日このクラス目標をデコレーションしよう、クラス明るくする第一歩だよ、手伝ってくれる人は残ってください」、部活やなんかで忙しいんだけど、ちょっとだけの参加も含めて半数近くの子がかかわってくれました。この写真がそのときの様子です。みんなクラスをなんとかしたいと思っている子ばっかりです。そして最後に掲示したんですが、この男の子はこのクラスじゃないんです。隣のクラスなんです。１年４組大変だねってみんな嫌がっていたんですけれども、なんか面白そうなことやっているぜってのぞきに来たんですね。そしてまっすぐ貼るよりアーチ型にした方がきれいだよとかそんな話も出ました。金曜日の放課後にこれが掲示されるわけです。月曜日に来たらクラスにこんな明るいのがいっぱい貼ってあるわけです。ジャジャンどうですみんな、これみんな“みんな優しく・信頼し合える楽しいクラス”『み・や・し・た』いいでしょう。こんないい学級目標をこんな紙一枚に書いてただ貼るんじゃつまんないからって作ったみんなの作品。これはクラスで輝きました。私の宝物です。

さあ、さっき読んでくれた女の子の文章の続きです。

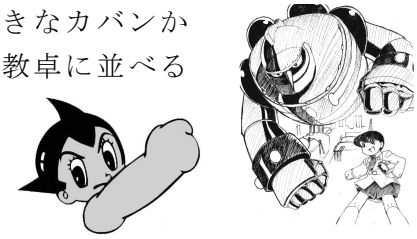
「そんなとき先生はこのいじめに対する意見文をクラス全員に書かせ、それをまとめて３８人の一歩という文集を作ってくれました。２学期に入ってもいじめや授業妨害は続きましたが、そのたびに先生は、３８人の一歩を作ってくれました。先生と私たちはこの文集を通してお互いの気持ちを理解し合い、どう変わっていきたいかを話し合うことができました。そして、入学からの長い間悩み続けていた状態から抜け出して、私たちは変わることができました。今では教室では男女区別なく語り合う姿が見られ、笑顔と笑い声がいっぱいになっています。４組の多くの生徒はこの宮下学級で２年に進級したいと言っています。」

もう早くクラス替えしたいと言っていたのがこんなに変わっちゃいました。嬉しかったです。何を持っていじめ解決とするか、いじめが止まればそれでいいのか…。これは何を持って不登校解決とするかというのも同じですよ。不登校解決は学校にくれば不登校解決じゃないですからね。いじめも、表面上いじめがなくなればいじめ解決じゃないんです。被害者の心のケア、ずーっとトラウマになるんです。これをケアしなくちゃいけません。そして加害者と言われる子の方にも事情があるんです。その事情を解決する方向に向かっていかないといけない。これは簡単じゃないです。家庭の抱える問題もありますから。いじめ解決を通して、このクラスの子ども達が何を学んだのか。こういうことが問われなければならないと思っています。ちょっと時間がきてしまいました。あとはレジュメに書いてあるのでちょっと、飛ばして。もう一つ言いたいことがあるんです。あのね、みなさん学校は失敗するところだって言葉聞いたことあるでしょ。失敗していいんだよ。実はね、子どもには失敗する権利があるんですよ。この失敗することによって学びに繋がっていくんだから。「学校は失敗するところ」というのであれば、いじめだって対人関係を学んでいく過程における失敗の一つです。そして子どもの失敗は、学びのチャンスなんです。その失敗はいじめたＡ君だけではなくて、周りで見ている子たちも、その失敗を目撃して当事者になっています。大切なことは失敗のわけ、一人ひとりの子どもの心の痛み、気づくかどうか。そしてその一人ひとりの子どもの支える手立てを担任がとれるのかどうか。最後は子どもの学校の体験を成長や学びにできるかどうかなんです。みなさん、失敗をマイナスの数、成功をプラスの数だと思って下さい。先生に褒められるのがプラスの数、先生に叱られるのがマイナスの数だと思って下さい。そうしたら、失敗して先生に叱られた数がずっと増えていけば、マイナスの値が大きくなっていきます。そしたら高校にもいけなくなるぞと思うかもしれない。大人社会だったら、商売に失敗して会社に損失を出したら、例えば５千万円損失を出したら、これから５千万円稼いで、取り返すみたいな、足し算で計算するでしょ。そんなこと言ったら、小さいころからずっと叱られてばっかりきた子は、ふくれあがった借金を返せなくなっちゃいます。どうせ返せないならって諦めるでしょ。たしかに「足し算」の大人はマイナス一万だと、そのあとプラス一万してやっとゼロにします。だとすると既に最初からプラス一万やっている人にはなかなか追いつけませんよね。でも子どもは、このマイナス一万を一気にプラス一万に変える、計算式を持っているんです。あ

ることをすれば一気にプラス一万に変わります。わかります？マイナス１を掛ければいいんです。どんなに数の大きいマイナスでもマイナス１を掛ければ、大きいプラスになるんですよ。でしょ？マイナス×マイナス＝プラスだから。子どもにとっての×マイナス１ってなんですか？それは考えて下さい。何かの体験をすると、このマイナス体験は、大きいプラス体験に変わるんです。ある大学でこの話をしたら、理学部の学生が、こう言ってました。これは高校ときに勉強した人としない人がいるかもしれませんが、『Imaginary number』というのがあるんです。ほら、中学では方程式で、解けないのがありましたよね。それまで習った数は２乗すると必ずプラスになるじゃない。でも２乗したらマイナス１になるっていうのを、高校で勉強しなかった？やったでしょう。i(アイ)ってやつ。i は２乗するとマイナス１になるんですよ。そしたらね、ある大学の理学部の学生が、「先生アイ(愛)を２回かあけてあげればいいですね。」って言ったね。カッコいいね、使わせてもらっています。i を２回掛けてあげたら子どものマイナス体験を大きいプラスに変えることができるんですね。ただし、ゼロには何を掛けてもゼロ。無事に何事もなくはゼロと同じ。マイナスオッケー！子どもの失敗は学びのチャンスなんです。

はい、さあいよいよこれ最後です。私は退職によって中学１年のときにこの子たちとお別れしました。この子たちが２年、３年になったときには私は一緒にいられなかったんです。そしたら、三年生になったとき、国語の授業の中で先生がちょっとした作文の課題を出しました。中に何を書いたらいいか困っている子がいたので、「じゃあ宮下先生に手紙書いたら」って言ってくれたそうです。その「手紙」がここにあります。読みます。

「宮下先生、お元気ですか。先生が退職されてから２年目の夏を迎えています。１年生の春、先生に初めて会った日。先生は大きなカバンから、鉄人２８号と鉄腕アトムのお人形を取り出して教卓に並べると、私たちに、鉄人とアトムの話をして下さいました。鉄人はリモコンで操られ命令された通りに行動するだけで自分の意思では行動できません。しかしアトムは自分で何が正しいのか判断し行動できます。先生は私たちにアトムのようになってほしいと言ってくださいました。１学期の宮下学級は授業妨害や、いじめ等が多く、クラスがまとまっていませんでした。学年でも学級崩壊しているクラスとして有名でした。クラスがひどく荒れているときには、宮下先生が授業中に他の先生に助けを求めることが何度もありました。今思えば、私たちは先生に大変迷惑をかけていたようです。ごめんなさい。でも先生はクラスの抱える問題への意見文をクラス全員に書かせ、それをまとめて『３８人の一歩』という文集を作ってくれました。２学期に入っても、いじめや授業妨害は続きましたが、そのたびに先生は『３８人の一歩』を作ってくれました。先生と私たちはこの文集を通して、お互いの気持ちを理解し、どう変わっていきたいか、話し合うことができました。どんなに辛いことがあっても先生は諦めずに、私たちを信じて、『大丈夫！４組は絶対に変わる！』と言ってくれました。（これをあ



る大学で話したら、なんで先生は絶対に変わると思えたんですか？って聞かれました。私は答えました。『そんなの簡単じゃん、当たり前じゃん。みんなにこんなクラスじゃなくて、こういうクラスにしたいという思いがあるんだから。そういう思いを持っているんだから、そっちに向かって動きやすいように、ちょっと後押しをしてあげれば、いいのさ。みんながこうなりたいと思っているのだから、応援すればできるんだよ。』って話しました。）合唱コンクールが終わる頃には宮下学級は自慢のクラスになりました。先生とのお別れ会で、私たちが先生に『アトムになれるよう、残り２年間の中学校生活を有意義に過ごしたい』と誓いました。

先日こんなことがありました。ある授業で、生徒二人が終わらせてない課題を終わらせたことにして、提出していたことが先生に見つかりました。先生は怒って、『クラス全体の責任だから全員で話し合うように。』と言いました。先生が席を外したとき、何人かの生徒が、その二人を責めはじめました。『おまえたち二人が悪いんじゃん。』と…。クラスの雰囲気が悪くなり、責められた女子生徒は青くなってうつむいてしまいました。そのとき別の何人かが、声をあげて言い返しました。『課題をごまかしたりする雰囲気が前からこのクラスにあったことが問題だよ。二人だけの責任ではなく、こういう見逃しを許していたクラス全員が反省するべきだよ。』その後、反省と今後の課題を話し合い、英語の先生に許していただくことができました。後になってから気づいたのですが、このとき反論した人はみんな、元宮下学級の仲間でした。私はそのとき、宮下先生のアトムを思い出しました。周りの意見に惑わされずに、自分が正しいと思ったことを相手に伝えること。私たちがたまにアトムに近づいているのかなと思う瞬間があります。そんなとき宮下先生の思いはしっかり私たちの心に宿っているのだと思い、嬉しくなります。」

…と、こういう感じですね。そして最後のスライドシーンですが、これがあの、荒れていた１年４組の子たちの、私の最後の学級の、集合写真です。笑顔がいっぱいです。ちょっと過ぎましたが、時間がきましたので終わりにしたいと思います。ありがとうございました。